

「男、突っ走る！」

第21回

第一稿

作・壽倉 雅

1 中央高校・全景

2 同・廊下

雅也と真弓が話している。

雅也「ねえ、本当に真弓さんが推薦演説者になつてくれるの？」

真弓「だからそうやって言ってるでしょ」

雅也「けど、どうして？」

真弓「協力したいの、私」

雅也「……？」

真弓「私、今年一年は受験勉強に専念しようと思ってるの。今回の生徒会選挙には出馬しないから、私の思いを、ツリーインに託すの。だから推薦演説をやるうって決めたの」

雅也「推薦演説者全然見つからなかったから、真弓さんがやってくれるって言うんだったら、こんなに心強いことないわ。何より生徒会役員経験者なんだもの、説得力もあるし」

真弓「確証はないんだけど、立候補者と推薦演説者が男女混合ペアの方が票を取りやすいっていうジンクスがあるの」

雅也「何それ？」

真弓「男同士や女同士で立候補と推薦演説をすると同性からしか票は集まらない。けど、男女混合でやれば、両方から票がもらえて、選挙に圧勝できるってことよ」

雅也「なるほど……」

真弓「まあ、あくまでジンクスだから、必ずしも当選できる保証はないんだけどね」

雅也「そっか……」

真弓「（笑って）でも大丈夫。私が、ツリーインを当選させてみせるから」

雅也「真弓さん……」

真弓「任せといて」

と、去っていく——呆然と見送る雅也。

3 同・コンピュータ室

雅也、孝之、美彩、春奈がパソコンで

作業をしている。

孝之「（驚いて）え、じゃあ藤野さんが木内君の推薦演説者になったんだ」

雅也「そう。どこで俺が立候補すること聞いたのか知らないけど、今日の昼、いきなりうちの教室に来てさ、『私がツリーインの推薦演説者になる』って言って。もう周りの友達ポカーンとしてたよ」

美彩「確かに今日、昼早く食べ終わってどっか出てったけど、パンテーンのところ行ってたんだ」

雅也「推薦演説者が全然決まらなくてさ、確かにいきなりあんなこと言うからびっくりしたけど、俺としてはこんなありがたいことはないと思ってさ。それに、男女混合だと両方からの票がもらいやすいつて教えてくれたから。まあ、それも作戦なんだろうね」

春奈「パンテーン知らないんだ。藤野の噂」

雅也「何、噂って？」

春奈「誘惑されなかった？」

雅也「誘惑？ そんなことあるわけないじゃん」

美彩「春奈。パンテーンは、簡単に女に騙されるようなタイプじゃないでしょ」

春奈「それもそっか」

雅也「え？ 今のどういう意味」

孝之「藤野さんは、男受けは良くても、実は女受けがあんまり良くないの」

雅也「そうなの？」

美彩「まあ、パンテーンが誰と関わろうがそれは勝手だから、私は特に言うつもりないけど、気を付けなよ。今にパンテーンも、女子の敵になっちゃうかもよ」

雅也「どうして？」

春奈「黒い噂をちよくちよく聞くの。クラスの女の子を退学に追い込んだとか、先生とちよつと訳ありとか」

雅也「あくまで噂でしょ。そんな話、まとも聞く奴があるかよ」

春奈「まあ、そうなんだけどね」

美彩「けど、先月のホワイトデーのお返しをもらったとき、あの子何て言ったと思う？」

雅也「何て言ったの？」

美彩「（ぶりっ子で）私、お酒入ってるチョコレートは酔っちゃうんですう、って言うたららしい」

雅也「そんなにぶりっ子する必要あった？」

美彩「だって本当にそうやって言ってたんだもん」

雅也「それを言われた男子は、どんな反応したの？」

美彩「みんなデレデレ。バカみたい」

雅也「女の敵は女ってことね」

春奈「だから気を付けなよ。男女混合ペアになっても、藤野が推薦演説になることで、逆に女子の票がもらえなくなる可能性もあるんだから」

雅也「……」

春奈「大丈夫よ。私と美彩は、ちゃんとパン

テーンに入れるから」

美彩「もちろん。そこは、ちゃんとパンテーンの味方だから」

雅也「そんな話聞くと、何だか不安になってくるなあ」

孝之「（美彩たちに）だから言ったんですよ。この話は、せめて選挙が終わってからにしたほうが良いって」

美彩「けど、パンテーンはこういう話に鈍感んだから、ちゃんとはじめのうちに伝えようこうと思ってる」

雅也「（苦笑して）ご忠告ありがとう。でもね、俺は今回立候補しない真弓さんから、生徒会を託されたからね。ただ推薦演説で真弓さんを使ったって思われないようにしなきゃ。勝手に変な噂だけ流されたらたまらないからね」

孝之「頑張ってるね、木内君」

雅也「うん」

大きく頷く雅也。

4 同・中庭（夕）

雅也と真弓が、演説の練習をしている。

N 「周囲の声に対する不安もありましたが、僕は推薦演説に名乗りをあげてくれたことに少なからず恩を感じていました。経験者としての真弓さんのアドバイスをもらいながら、僕たちは何度も演説の練習をしたのでした」

5 同・校門前（朝）

生徒たちが登校している——雅也が紙を持って挨拶運動をしている。隣に一緒にいる真弓。

雅也 「生徒会書記に立候補をしました、3年2組の木内雅也です。応援よろしくお願ひします」

真弓 「生徒会書記立候補の木内雅也をよろしくお願ひします。皆さんの清き一票をお願ひします」

6 同・廊下

孝之と美彩が歩いている。

美彩「パンテーン、今日も真弓と一緒に挨拶運動やってたね」

孝之「良いじゃありませんか。純粋に応援してあげましょうよ」

美彩「まあ、そうなんだけどねえ」

孝之「六票差で負けた木内君は、かどけんのお思いも一緒に持って立候補したんですよ」

美彩「そうなの？」

孝之「木内君、元々前回の選挙で立候補はしないつもりだったんですよ。それが、かどけんが辞めた時、生徒会選挙に出て俺の分まで学校生活を楽しくしてくれてって言われたんですって」

美彩「……」

孝之「木内君は、自分だけじゃない、周囲の人の思いも背負って、今頑張ってるんですから。見守ってあげましょう」

難しい顔の美彩。

7 同・3年2組教室

雅也が入ってくる。

雅也「おはよう」

悠喜と壮吾が、雅也のもとへやってくると、

悠喜「朝からご苦労様」

壮吾「大変だね、選挙も」

雅也「ありがとう。この一週間が勝負だから

ね。まあ今更言うことじゃないけど、どう

か一つ応援よろしくお願いします」

悠喜「何言ってるんだよ。このクラスは、全

員木内の応援するに決まってるじゃないか」

壮吾「そうだよ。逆に、うちー以外に票入

れるような裏切り者がおったら、俺たちで

あぶりだしてやるよ」

雅也「そう言ってくれるだけで、自信になる。

俺以外の立候補者は、みんな経験者だから

ね。選挙の空気も慣れてるだろうし、経験

してるから今回も行けるって思ってるかも

しれないからね」

壮吾「いや、かえって今回も立候補してるから、同じ人じゃなくて違う人にやってもらおうって気持ちでうちーに投票する人だっているんじゃない？」

悠喜「そうだよな。毎回生徒会の顔ぶれが同じだったら、それはそれでつまらないよな」

雅也「確かに……」

壮吾「新しい人が入ったほうが良いって思ってる人が多くいたら、うちーの勝ち目だって十分あるかもよ」

雅也「うん……確かにその可能性もあるけど、だからといってそうやって油断すると、足元見られてまた落選することだってあるからね。投票が終わるまでは、気は抜けないね」

8 同・生徒会室

井深が仕事をしている——真弓が入ってくる。

真弓「失礼します」

井深「お、藤野どうした？」

真弓「ベルマーク、出しに来たんです」

井深「その袋の中に入れていて」

真弓「分かりました」

井深「木内の推薦演説、頑張ってるらしいじゃないか」

真弓「私は今回出馬しませんからね。私の意志を託したんです」

井深「どうして木内だったんだ」

真弓「何事も一生懸命に頑張ってるからですよ。前回、たった六票で負けた悔しさからのリベンジだっていうことも聞いてます。前回とはやる気が違うのは間違いないことです。純粹に応援してあげたいと思ったんです。だから、私のほうから推薦演説をやるって本人に伝えにいきました」

井深「まあ木内も、経験者の藤野が側にいてくれたら、何かと安心だろ」

真弓「私がいなくても、自分の思いをちゃん

と伝えれば、全校生徒もそのやる気を分か
つてくれますよ」

井深「そうだな」

真弓「先生も、ちゃんと応援してあげてくだ
さいね」

井深「そりゃ応援したいけど、生徒会主任と
しては全員を公平に見ないといけないから
な」

真弓「それもそうですね」

井深「でも、その頑張りは評価してるから、
頑張れよ」

真弓「はい」

9 同・3年2組教室

雅也が、時間割表に明日の授業をチヨ
ークで書いている——ふと手が止まる
雅也。掃除をしている寧々がそれに気
づき、

寧々「どうしたの？」

雅也「いや……あと三日なんだなと思って」

寧々「ああ、選挙ね」

雅也「うん」

寧々「ママなら大丈夫だって」

雅也「……」

寧々「ママが朝の挨拶運動してることも知ってるし、メールで挨拶文送ってることも知ってる。自分の行動に自信持てば、みんなもそれを見て、この人なら大丈夫だって投票してくれるから」

雅也「そうだね……」

と、チョークで時間割を書いていく雅也。

N「明日の時間割を書くことは、学級代表にとって毎日メインとなる仕事の一つでした。今年の十月から今年にかけて学級代表をやっている自分にとって、この作業は日課になっていました。だからこそ、一日一日が過ぎていくことがあつという間に感じており、つい自分の中で、選挙まで残り何日とカウントダウンをしまっていたのでした」

10 同・体育館

舞台上で椅子に座っている雅也、真弓、
他立候補者の人々。

N 「そして、ついに魔の時がやってきたので
す」

× × ×

立候補者や推薦演説者が、次々に演説
をしていく。

N 「どうしてこんなにも、みんなスラスラと
話せるのだろう、と少なからずこの時、僕
は自分は負けたと思っていました」

司会席に立っている井深。

井深 「では続いての立候補者です。生徒会書
記立候補者、木内雅也」

雅也 「はい」

と、真弓と共に起立をし、演台までや
ってくる。真弓、マイクを持つと、

真弓 「三年六組の藤野真弓です。私は、生徒
会書記に、木内雅也君を推薦します。木内

君は学級代表や部活の副部長など、率先して役職を受け、みんなを引っ張ってくれていきます。クラスでもみんなのサポート的な役回りをしており、お手本のような存在です。生徒会には、木内君のような存在が不可欠です。また、木内君が今回立候補をした理由の一つに、昨年辞めてしまった友達から、『俺の分まで学校生活を楽しくしてくれ』と言われたことがあります。友達思いの木内君は、その子の分まで学校生活を楽しみ、皆さんにとって良い学校生活になるように頑張ってくれと信じています……」

と、流暢に演説をしていく真弓——隣で見ている雅也。

N 「真弓さんの推薦演説は、完璧な演説でした。僕がなぜ生徒会役員になったのか、普段僕がどんなことをしているのか、これほど僕を上手に持ち上げてくれる演説がこれまで他にあったらどうか……僕は思わず、

真弓さんの演説に、心の中で拍手をしていました」

と、真弓の演説が終わり、雅也がマイクを持つ。

雅也「生徒会書記に立候補しました、3年2組の木内雅也です。二、三年生の皆さんがご存知だとは思いますが、僕は昨年の後期にも生徒会選挙に立候補をしました。ですが、わずか六票で落選しました。その時は悔しくて、もう二度と選挙なんてやらないって思っていました。でもそんなある日、とても仲の良かった友達が学校を辞めてしまいました。その時はとても悲しかったです。でもその時、先ほど藤野さんの演説にもあったように、自分の分まで学校生活を楽しんでくれと言われました。僕はその時に、次の生徒会選挙でリベンジをしようと決めました。今回は自分だけじゃなく、その辞めてしまった友達や、これから受験勉強に専念する元生徒会役員である藤野さんのた

めにも、生徒会役員になろうと決めました
……」

と、演説を続けていく雅也。

N 「前回同様、いざ本番となると自分がどんなことを話したのか覚えていませんでした。しかし、思うがままに自分の今の思い、そしてかどけんと約束、真弓さんから託された意志などを正直に伝えたつもりでいました」

11 同・3年2組教室（夕）

雅也が一人、考え込むように座っている――真弓が入ってくる。

真弓 「お疲れ、ツリーイン」

雅也 「ああ、真弓さん」

真弓 「頑張ったね」

雅也 「俺、ちゃんと喋れてたかな？」

真弓 「大丈夫。多少言葉が詰まっても、自分の言葉で伝えられたんだったら、それでオッケーだよ。たまにいるんだよ、自分のセ

リフを一字一句完璧に覚えようとして、本番になって全部飛んじやうとか」

雅也「ああ。確かにこういう時って、自分の言いたいこととかキーワードだけを覚えて、後は自分の言葉に直せば良いんだもんね」

真弓「そう」

雅也「真弓さんの今日の推薦演説も、そんな感じだったの？」

真弓「うん。何となく、自分の言いたいことを整理しただけ」

雅也「それであれだけのことが言えるなんて、やっぱりすごいわ」

真弓「ツリーインも、今日の演説が一番良かったよ」

雅也「そりゃ、何回も練習したからねえ。付き合ってくれてありがとう」

真弓「私は、何とんでもツリーインを当選させたいから」

雅也「そっか……」

真弓「明日の当選結果、楽しみね」

雅也「（苦笑して）どうかな……」

12 同・全景（翌朝）

13 同・3年2組教室

チャイムが鳴り、安代が入ってくる――
――それぞれ自席に戻る雅也を始めとする生徒たち。

安代「皆さん、おはようございます」

一同「おはようございます」

安代「昨日は、生徒会選挙お疲れ様でした。

皆さん、ちゃんと投票はできましたか」

雅也「……」

安代「（選挙結果の紙を見せて）木内君、当選おめでとうございます」

雅也「え！？」

悠喜「おめでどう」

壮吾「おめでどう、うちー」

寧々「おめでどう」

優菜「ママおめでどう」

と、拍手をする一同——安代、当選結果の紙を掲示板に貼る。

雅也、慌てて掲示板の目の前に来る——悠喜、壮吾、良樹、一磨、康行、寧々、優菜、由紀恵も掲示板を見にやってくる。

『木内雅也 438票 当選』と書かれている。

雅也「当選した……」

良樹「良かったな」

一磨「おめでとう、木内」

康行「おめでとう」

雅也「みんな、ありがとうございました」
一同に一礼し、笑顔になる雅也。

つづく